

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
技術英語	平成20年度	林 浩士	専2	前期	学修単位1	必

[授業のねらい]

近年、企業や社会において英語運用能力を証明する手段としてTOEIC等の資格試験が利用されることが急増している。現在の英語力を把握しそれを効率よく向上させていくために、本授業ではTOEICを例にとり、そこで測られる英語運用能力を高めるための問題演習をととして、総合的な英語力向上を目指すことをねらいとする。

[授業の内容]

全ての週の内容は、学習・教育目標(A) <視野> (C) <英語> および JABEE 基準 1(1)(a), (f) の項目に相当する。

第1週 ガイダンス (学習の進め方、TOEIC について)
Parties & Events (Unit 1)

第2週 Parties & Events (Unit 2)

第3週 Instruction (Unit 3)

第4週 Travel (Unit 4, 5)

第5週 Hotel & Restaurant (Unit 6, 7)

第6週 Advertisement (Unit 8, 9)

第7週 Airport & Airplanes

第8週 中間試験

第9週 Shopping (Unit 11)

第10週 Training & Education (Unit 12)

第11週 Management (Unit 13)

第12週 Hospital (Unit 14)

第13週 Complaints (Unit 15)

Order & Billing (Unit 19)

第14週 Meeting (Unit 16, 17)

第15週 Shipping & Delivery (Unit 18)

第16週 News & Weather (Unit 20)

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. ある場面の写真を見ながら英語を聞き、状況を把握できる。
2. 英語の問いかけに対して適切な応答ができる。
3. 対話を聞き、その内容のポイントを把握できる。

4. 説明やアナウンスを聞き、その内容のポイントを把握できる。
5. 状況を的確に表現するために必要な語彙を選べる。
6. 説明文の中で、内容を的確に表現するための語彙を選べる。
7. 説明的文章の内容を把握し、ポイントを指摘できる。

[この授業の達成目標]

TOEIC で測られる英語運用能力に即して、それぞれの分野に関する問題演習をこなす継続的努力を行い、英語使用の四技能のうち特に「聞くこと」「読むこと」に関して、発話や文章のポイントを理解できる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1～7の習得の度合を中間試験、期末試験、小テスト、課題により評価する。評価における「知識・能力」の重みの目安は1～4を50%、5～7を50%とする。試験問題や課題のレベルは、百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進め、自己学習の成果を評価するために課題提出を求めたり確認テストを行なうので、日頃から自己学習に励むこと。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] TOEIC 375点、「COCE T3300」修了程度の基礎知識

[自己学習] 予習としてはテキストの演習問題を解いてくること、またその結果60%以上正解できる程度に英文の内容を理解してこること。復習としては授業ノートを整理し、重要事項を自分で使えるまで定着させておくこと。授業で保証する学習時間と、予習・復習(中間試験、定期試験のための学習も含む)及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。

教科書: *Step-by-Step Prep for the TOEIC Test - Step2 Intermediate course* - (ALC)

参考書: (特に指定しないが、前年度までの参考書類は用意しておくこと)

[学業成績の評価方法および評価基準]

中間、期末の2回の試験の平均点を60%、小テストの合計点を30%、授業ノート・課題の評価を10%として評価する。ただし、中間試験で60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として中間試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
総合英語	平成20年度	Mike Lawson	専2	前期	学修単位1	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>Basing class activities on various cross-cultural themes, the objective of this course is to improve students' practical levels of reading and listening comprehension and their abilities to converse in English.</p>																																					
<p>[授業の内容]</p> <p>The following content conforms to the learning and educational goals: (A) <Perspective>[JABEE Standard 1(1)(a)], and (C) <English>[JABEE Standard 1(1)(f)].</p> <p>Week</p> <table border="0"> <tr> <td>1</td> <td>Introduction to the course</td> <td>7</td> <td>REVIEW</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>Unit 13—The business of beauty</td> <td>8</td> <td>MIDTERM</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>Unit 14—A career in fashion</td> <td>09</td> <td>Unit 19—Seeing the world</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>Unit 15—The pressure to look good</td> <td>10</td> <td>Unit 20—Time for a vacation</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>Unit 17—Fight for your rights</td> <td>11</td> <td>Unit 21—Great explorers</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>Unit 18—Staying young</td> <td>12</td> <td>Unit 22—Male and female roles</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>13</td> <td>Unit 23—Women fighting back</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>14</td> <td>Unit 24—How different are we?</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>15</td> <td>REVIEW</td> </tr> </table>	1	Introduction to the course	7	REVIEW	2	Unit 13—The business of beauty	8	MIDTERM	3	Unit 14—A career in fashion	09	Unit 19—Seeing the world	4	Unit 15—The pressure to look good	10	Unit 20—Time for a vacation	5	Unit 17—Fight for your rights	11	Unit 21—Great explorers	6	Unit 18—Staying young	12	Unit 22—Male and female roles			13	Unit 23—Women fighting back			14	Unit 24—How different are we?			15	REVIEW	
1	Introduction to the course	7	REVIEW																																		
2	Unit 13—The business of beauty	8	MIDTERM																																		
3	Unit 14—A career in fashion	09	Unit 19—Seeing the world																																		
4	Unit 15—The pressure to look good	10	Unit 20—Time for a vacation																																		
5	Unit 17—Fight for your rights	11	Unit 21—Great explorers																																		
6	Unit 18—Staying young	12	Unit 22—Male and female roles																																		
		13	Unit 23—Women fighting back																																		
		14	Unit 24—How different are we?																																		
		15	REVIEW																																		
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>At a level suited for second semester, second year advanced students, students will:</p> <p>1. Improve their practical level of reading comprehension.</p>	<p>2. Improve their English writing ability.</p>																																				
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>Students' should be able to improve their practical levels of reading and listening comprehension and their abilities to converse in English.</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>Students' levels of practical reading comprehension will be evaluated through the use of two exams (a midterm and exam and a final exam). Students' English writing ability will be evaluated through the use of 10 writing assignments. Students will have attained the goals provided that they have earned 60% of the total points possible for this course, which includes 2 exams, 10 essay assignments and 10 reading comprehension homework assignments</p>																																				
<p>[注意事項]</p> <p>Please visit my website (http://www-intra.srv.cc.suzuka-ct.ac.jp/genl/Lawson/) for information related to this class.</p> <p>Please visit our Internet website "English-Muscle" at http://www-intra.srv.cc.suzuka-ct.ac.jp/engcom/ for fun English-learning activities.</p> <p>You may contact me at any time at either of the two following email address: lawson@genl.suzuka-ct.ac.jp, lawson40@gmail.com.</p>																																					
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>An understanding of basic English syntax and grammar</p>																																					
<p>[自己学習]</p> <p>The total time necessary for students to acquire an understanding of the course is 45 hours, including classroom time and study time outside of the classroom.</p>																																					
<p>教科書： Craven, Miles. <i>Reading Keys</i> (Silver, Book B). Macmillan Languagehouse.</p> <p>参考書： Material as distributed in class. A Japanese-English dictionary and an English grammar guide.</p>																																					
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>Students' levels of practical reading comprehension and English writing ability will be evaluated through 2 exams, 10 essay assignments and 10 reading comprehension assignments. Grades will be based on the following percentages: Midterm Exam, 25% Final Exam, 25% Homework, 25% Essays.</p>																																					
<p>[単位修得要件]</p> <p>Students must obtain at least 60% of the total possible points in order to receive 1 credit.</p>																																					

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
国際関係論	平成20年度	益田 実	専2	後期	学修単位2	必

[授業のねらい] 国際的な視点で物事を考える能力を身につけ、自国や自民族だけの文化や価値観にとどまらず、他国や他民族の立場から物事を考える能力を身につける。そのために基本的には民族をそれぞれその構成母体とする国家群から形成される近現代の国際社会のシステムが発展してきた歴史のプロセスを広くグローバルな観点から理解することを目標とする。

[授業の内容]

すべての内容は、学習・教育目標(A)〈視野〉と、JABEE基準1

(1)(a)に対応する。

第1週 近代国際関係の基礎としての近代の民族(ネーション)概念の重要性の認識。

第2週 民族(ネーション)を現に目の前にあるものとして考える比較的、"static"な諸議論の紹介と検討、整理。

第3週 上記と同じ内容。

第4週 上記と同じ内容。

第5週 民族(ネーション)の歴史的発展過程に注目した、より"dynamic"な諸定義の紹介と検討、整理。

第6週 上記と同じ内容。

第7週 総合的に得られる疑問点の整理。中間的まとめ。

第8週 中間試験

第9週 現時点で最も説得力を持つと思われる近代国際社会の民族問題研究の紹介その1(アーネスト・ゲルナーの議論)

第10週 上記と同じ内容。

第11週 上記と同じ内容。

第12週 現時点で最も説得力を持つと思われる近代国際社会の民族問題研究の紹介その2(ベネディクト・アンダソンの議論)

第13週 上記と同じ内容。

第14週 これまでの議論のまとめ。

第15週 民族(ネーション)を単位とする国際関係のありかたの将来像について

第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認、授業のまとめ

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 民族を構成単位とする近代国際社会の歴史的特殊性を理解している。
2. 国際社会が形成されるに至った要因を理解している。
3. 国際社会での民族の相互理解の可能性を理解している。

4. 民族形成の多様なありかたを理解している。

5. 日本の近代国際社会内での位置について理解している。

6. 民族を基礎とする国際社会の変容の可能性を理解している。

[この授業の達成目標]

近代国際社会の構成単位としての「民族」の本質を理解し、その歴史的淵源と今日的な位置づけ、そして将来的なあり方の変化についての独自の展望ができる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記「知識・能力」1から6の習得度合いを中間試験、レポート、期末試験により評価する。評価における「知識・能力」の重みの目安は1, 2, 3, 4を各15%, 5, 6を各20%とする。試験とレポート課題のレベルは百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進め、自己学習の成果を評価するためにレポート提出を求め、日頃から自己学習に励むこと

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]

近代世界について、特に政治体制と経済体制の変化と分布についての知識

[自己学習]

授業で保証する学習時間と、予習・復習(中間試験、定期試験のための学習も含む)及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。

教科書: なし。ノート講義

参考書: レポート課題、自己学習用参考文献は別に指定する。

[学業成績の評価方法および評価基準]

中間、期末の2回の試験の平均点を60%, レポートの評価を40%として評価する。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
経営学	平成20年度	渡邊 明	専2	後期	学修単位2	選

[授業のねらい]

企業間ネットワークを結び、異なる企業があたかも一つの企業のように戦略的に連携して活動することで、業務プロセスのリードタイムを抜本的に短縮することが可能になったと言われる。そこでの結びつきは戦略的提携とよばれ、SCM (Supply Chain Management) が流通に関する戦略的部分最適を追求するものとして認識され始めている。そこで最近研究が深化してきた SCM, ERP, Logistics Cost 等々を分かり易く解説することを本講義の目的としている。

[授業の内容]

すべての内容は学習・教育目標(A) <視野> と JABEE 基準1(1)(a) に対応する。

第1週 ガイダンス：企業間ネットワークとは
第2週 最近展開されている NGN の本質とは何か
第3週 全体最適と部分最適及び戦略的部分最適
第4週 モジュール生産とインターネット
第5週 サプライチェーンとは何か
第6週 サプライチェーンの具体例（事例研究）
第8週 中間試験

第9週 デマンド・チェーン・マネジメントとは何か
第10週 デマンド・チェーン・マネジメントの具体例
第11週 工作機械の進歩と管理の進歩（事例研究）
第12週 ロングテールとMNCネットワーク及び京都試作ネット
第13週 ロングテールとMNCネットワーク及び京都試作ネット
第14週 ビジネスモデルの必要性（事例研究）
第15週 ビジネスモデルの必要性（事例研究）
第16週 ビジネスモデルの必要性（事例研究）

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 企業戦略とは何かを理解できる。
2. 企業経営のパラダイム変化とは何かを理解できる。
3. 流通とは何かを理解できる。

4. 流通マネジメントとは何かを理解できる。
5. 企業間ネットワークとは何かを理解できる。
6. 企業経営における時代区分の重要性を理解できる。

[この授業の達成目標]

企業・経営・管理とは何かを理解でき、実社会へ出たとき、社会人としての適応ができる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1～6の習得の度合を中間試験、期末試験、レポートにより評価する。評価における「知識・能力」の重みの目安はおおむね均等とする。試験問題とレポート課題のレベルは、百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 経営学は、インターネットの発展と共に急速に変化している、教科書に記述されていることが、必ずしも現実を分析する手段にならない場合も多くなっている。講義は教科書を中心に説明を行うが、適宜最近の話題についての資料を印刷し配布する。現在どんな問題点があり今後どのような方向に社会が進むかを読む力を、是非養ってほしい。授業は自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進める。授業中参考書や必読書を紹介するので、その都度目を通してから授業を受けるのが望ましい。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]

[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。

教科書：井上照幸、林倬史、渡邊 明編著『ユビキタス時代の産業と企業』税務経理協会、2007年

参考書：講義のとき指示する。日本経済新聞はできる限り目を通しておくこと。

[学業成績の評価方法および評価基準]

中間、期末の2回の試験の平均点を80%、レポートの評価を20%として評価する。ただし、中間試験で60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として中間試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
コミュニケーション論	平成20年度	西岡 将美	専2	後期	学修単位2	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>「コミュニケーション能力を身につけること」とは、相手の気持ちを尊重し理解することが重要であるとともに、自分の気持ちを的確に伝えることから大切である。本授業では、特に「エンジニア」として、自らが取り組む具体的な課題に関する問題点・成果等を論理的に記述し、伝達、討論できる能力を身につけることを目標とする。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべての内容は、学習・教育目標 (A) の < 視野 > < 意欲 > , および (C) < 発表 > と JABEE 基準 1(1)(a), (f), (g) に対応する。</p> <p>第1週 授業目標及び内容の説明、およびレポート作成上の注意</p> <p>第2週 コミュニケーションの技法を身につけるために (「コミュニケーションの戦略とは」について)</p> <p>第3週 コミュニケーションのための基本 (語彙力を身につける 「敬語表現の基本」)</p> <p>第4週 コミュニケーションのための基本 (その 「敬語の奥にある考え方」)</p> <p>第5週 コミュニケーションのための基本 (その 「気配りのある文章」を書く)</p> <p>第6週 コミュニケーションのための基本 (その 「自分の説明がわかってもらえないときの応答」)</p> <p>第7週 コミュニケーションのための基本 (その 「言葉で人を動かす方法」)</p>	<p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 中間試験についての留意事項 コミュニケーションのための基本 (その 「相手に配慮しつつ依頼する表現」)</p> <p>第10週 新たなコミュニケーションのあり方 (エンジニア「論理思考力」の正しい使い方)</p> <p>第11週 新たなコミュニケーションのあり方 (「論理思考力」をコミュニケーションにフルに活かす)</p> <p>第12週 言葉に「まごころ」を込めるコミュニケーション</p> <p>第13週 謝罪の気持ちを表すコミュニケーション</p> <p>第14週 プレゼンテーション演習</p> <p>第15週 プレゼンテーション演習</p> <p>第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認、授業のまとめ 授業アンケートの実施</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コミュニケーション論の基本概念を理解している。 2. 「コミュニケーションのための基本」においては、表現するための基礎である、敬語表現、修辞法、原稿用紙の使い方や手紙文の書き方などの言語について学ぶ。 3. 多様なコミュニケーションのあり方を理解し、状況に応じた 	<p>コミュニケーション力を有している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 「プレゼンテーション」能力を身につける。具体的には、複数の人を対象に、短時間で、論理的・体系的に情報を伝え、意思決定につなげるコミュニケーションの方法を身につける。 5. 1, 2, 3, 4, を習得することにより、状況にあわせた有効なコミュニケーションが出来る。
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>自己表現や他者理解の重要性に関して、コミュニケーションを理解し、将来社会人として様々な場面で必要となるであろう社会関係や文化的文脈を読み取る能力を身に付け、コミュニケーションに関する議論の基本概念を理解している。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記「知識・能力」1～5に関して中間試験、期末試験で評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みの目安は概ね均等とする。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項] 学習に対する積極的な姿勢と、自ら課題を探究する意欲を持つこと。また、授業を受講する際の注意事項。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 高専国語に関するすべての学習内容、特に「言語」についての基礎知識。</p>	
<p>[自己学習] 授業における学習時間と試験勉強を含めた予習及び復習、そして課題準備に必要な標準的学習時間の総計が、90 時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：「コミュニケーション力をみがく」 森山卓郎著 NHKブックス、高校生必修語彙ノート 桐原書店編集部編 桐原書店 参考書：「エンジニアのためのコミュニケーションの技術」 崎山みゆき、平野茂実著、あさ出版</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>後期中間・学年末の試験の平均点を60%、課題(レポート)20%、プレゼンテーションの結果を20%として評価する。ただし、後期中間・学年末試験ともに再試験を行わない。</p>	
<p>[単位修得要件] 後期中間・学年末の2回の試験、課題(レポート)、小テストにより、学業成績で60点以上を修得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
センサ工学	平成20年度	鈴木 昭二	専2	後期	学修単位2	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>産業界における生産現場はもとより、大学等の研究機関において物理情報の検出、測定、解析を行う場合も、センサ関連技術を知っておくことは重要である。この科目では、センサの歴史と役割、センサの種類、基本構成、動作原理を学ぶとともに、センサの選択方法、センサを有効に活用するための回路技術、性能指数およびセンシング応用技術を学び、自動化、計測制御技術の基礎を修得する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週の内容は学習・教育目標(A)〈視野〉, JABEE 基準1(1)(a)(b)に相当し、第2週～第16週の内容は学習・教育目標(B)〈専門〉およびJABEE 基準1(1)(d)(2)a)に相当する。</p> <p>第1週 センサ工学の歴史と現状 第2週 センサの定義、基本構成 第3週 センサの分類 第4週 センサの信号処理技術 第5週 機械量センサ：変位センサ 第6週 機械量センサ：位置センサ</p>	<p>第7週 機械量センサ：圧力センサ 第8週 中間テスト 第9週 機械量センサ：ひずみゲージ 第10週 温度センサ：パイメタル、測温抵抗体 第11週 温度センサ：熱電対、サーミスタ、 第12週 温度センサ：IC温度センサ 第13週 温度センサ：焦電形温度センサ 第14週 湿度センサ：湿度の定義と表し方 第15週 湿度センサ：各種湿度センサ 第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認、授業のまとめ</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. センサ工学の歴史と現状について学び、センサの技術動向を知ることができる。 2. センサの定義、基本構成を理解できる。 3. 多岐にわたるセンサを分類・整理し、全体像を把握することができる</p>	<p>ができる。 4. センサを用いた自動化、制御技術の基礎を理解できる。 5. 機械量センサ(変位、位置、圧力、ひずみ)、温度センサ、湿度センサについて動作原理、構造、性能および応用例を理解できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>センサ工学の歴史をもとに、センサの種類、基本構成、動作原理を学ぶとともに、センサを有効に活用するための回路技術を修得することから、センサを自動化、計測制御などに応用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>センサに関する「知識・能力」1～5の確認を中間試験、期末試験、レポートにより評価する。1～5に関する重みは同じである。2回の試験の平均を80%、レポートを20%として評価する。合計点の60%で目標の達成を確認できるレベルの試験等を課す。</p>
<p>[注意事項] 規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進め、自己学習の成果を評価するためにレポートの提出を求めるので、日頃から自己学習に励むこと。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>電気電子材料、半導体デバイス、電子回路および信号処理に関する基礎知識があることが望ましい。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習(中間試験、定期試験のための学習も含む)およびレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：「センサと基礎技術」 南任 靖雄著 (工学図書株式会社) 参考書：「センサデバイス」 浜川 圭弘著(コロナ社), 「センサ」 千原 国宏著(コロナ社), 「センサの上手な使い方」 岡岡 昭夫著(工業調査会), 「最近のセンサ」 電気学会編 などがある。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 後期中間、学年末の2回の試験の平均点を80%、課題レポートの結果を20%として、その合計点で評価する。ただし、後期中間試験で60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として再試験の成績で置き換えるものとする。</p> <p>[単位修得要件] 後期中間、学年末の2回の試験の平均点および課題レポートの結果をそれぞれ80%および20%とし、その合計点が60点以上であること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
物性工学	平成20年度	江崎 尚和	専2	前期	学修単位2	必

[授業のねらい]

この授業では、物質を構成している原子や結晶体の構造、原子間の結合様式、ならびに原子の集合体としての物質の機能（物性）の発現をこれらと密接に関連するいくつかの代表的な物性について講義する。その要因を理解するための基礎知識を身につけることを目的とする。

[授業の内容]

学習教育目標 (B) < 基礎 > JABEE 基準 1(1)(c) に対応

- 第1週 物質を構成する原子について
- 第2週 物質の諸性質とその周期性
- 第3週 物質の構造（主に結晶構造）
- 第4週 結晶の対称性と結晶面・方向の表記
- 第5週 結晶による回折現象：
- 第6週 回折X線の強度と構造因子
- 第7週 巨視的および原子論的観点から見た物質の弾性
- 第8週 中間試験

- 第9週 原子論的観点から見た物質の弾性について
- 第10週 原子論的観点から見た物質の熱的性質：熱膨張
- 第11週 ポテンシャル・エネルギー曲線と熱膨張係数
- 第12週 ポテンシャル関数を用いた熱膨張係数の見積もり
- 第13週 原子論的観点から見た物質の熱的性質：熱振動
- 第14週 物質内における原子振動の大きさの見積もり
- 第15週 物質内における原子振動の大きさの見積もり
- 第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認、授業のまとめ

[この授業で習得すべき知識・能力]

学習教育目標 (B) < 基礎 > JABEE 基準 1(1)(c) に対応

1. 原子の電子核構造と、それを決める4つの量子数の意味を理解している。
2. 物質の一般的な性質を、構成する原子の電子核構造と関連付けて説明できる。
3. 立方晶系の結晶についてミラー指数による面および方向の表記ができる。
4. 結晶による回折現象が説明できる。
5. 立方晶系の結晶について構造因子の計算ができること。またそこから消滅則が導き出せる。

6. ポテンシャル関数とその曲線から熱膨張現象を説明できる。
7. 物質の種々の性質をポテンシャル・エネルギー曲線と関連付けて説明できる。
8. 簡単な放物線ポテンシャルから物質内部での原子振動の大きさを見積もり計算できる。

[この授業の達成目標]

物質を構成する元素の構造と性質や、それらの集合体としての結晶が示す回折現象などを理解するとともに、原子論的な観点から弾性や熱的性質などの物性の起源を理解し説明できる。

[達成目標の評価方法と基準]

[この授業で習得する「知識・能力」] 1～8の習得の割合を中間試験、期末試験、レポートにより評価する。各項目の重みは同じである。試験問題とレポート課題のレベルは、100点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 専門共通科目であるため、いろいろな素養を持った学生が授業を受けることを考慮して、材料の物性について工学的観点から幅広く、わかりやすく講義する予定である。ただし、開講時間数が少ないため物性のすべてをここで取り扱うことは不可能である。上記以外の諸物性に関して興味のある人は各自参考書等で勉強すること。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]

本科ならびに専攻科ですでに習得した、応用物理に関する基礎知識。

[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。

教科書：ノート講義（プリント資料）

参考書：「技術者のための固体物性」 飯田修一訳（丸善）

「物性工学の基礎」 田中哲郎著（朝倉書店） 「材料の物性」 兵藤申一他著（朝倉書店）

[学業成績の評価方法および評価基準]

求められたすべてのレポートの提出をしていなければならない。中間・期末の2回の試験の平均点を80%、レポートを20%で評価する。ただし、中間試験で60点に達しなかったものについては再試験を行い、60点を上限として再試験の成績で置き換えるものとする。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
生命工学	平成20年度	田村 陽次郎	専2	後期	学修単位2	選

[授業のねらい]

生物を分子で出来た機械として捉える時,その知識は物作りのための重要な源泉になる。講義では生理学,分子生物学の用語に慣れると共に,生命の作る機械の中で,神経回路および筋収縮の機構についての理解を深めていく。

[授業の内容]

第1週 - Structure of skeletal muscle
 第2週 - Structure of actin and myosin filament
 第3週 - Effect of calcium ions on actin filament
 第4週 - Length-tension relationship of skeletal muscle
 第5週 - Organization of the nervous system
 第6週 - Structure of an alpha motor neuron
 第7週 - Action potential in nerve fibers
 第8週 中間試験
 第9週 - Neuromuscular transmission and
 excitaion-contraction coupling
 第10週 - Types of muscle contraction

第11週 - Force-velocity characteristic of skeletal muscle
 第12週 - Motor unit
 第13週 - Effect of muscle fiber type on tension and fatigue
 第14週 - Central and peripheral fatigue
 第15週 - Recruitment patterns of motor units
 第16週 - 定期試験の答案返却と達成度の確認,授業のまとめ

上記の授業は全て学習,教育目標(B) <基礎>および,JABEE 基準1(1)の(c)に対応する。

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 神経系,筋等において生理学,分子生物学で使われる用語を理解する。
2. 神経系,筋等に現われる生命分子機械の構造を理解する。

3. 神経系,筋等に現われる生命分子機械の働きを理解する。
4. 生命分子機械の構造と機能の関係を理解する。

[この授業の達成目標]

生理学,分子生物学の用語に慣れると共に,生命の作る機械の中で,特に,神経回路および筋収縮の機構についての理解する。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1~4の習得の割合を中間試験,期末試験,レポートにより評価する。評価における「知識・能力」の重みの目安は1~4を各25%とする。試験問題とレポート課題のレベルは,百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進め,課題提出を求める。米国の大学の学部学生向けに作られた生理学のテキストをもとにした輪講を行う。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 熱力学の基礎を理解していること。学年相当の英語力があること。

[自己学習] 授業で保証する学習時間と,予習・復習(中間試験,定期試験のための学習も含む)及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が,90時間に相当する学習内容である。

教科書: プリント配布

参考書: 「Physiology coloring workbook」K.Axen et.al., (The Princeton review), 「Illustrated principles of exercise physiology」K.Alex & K.V.Alex (Prentice Hall)

[学業成績の評価方法および評価基準] 自己学習を前提として適宜求める課題の提出をしていなければならない。後期中間・学年末の2回の定期試験を50%、課題を50%として評価し、60%以上の得点を得たものを合格とする。再試験は行わない。

[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。

--

<p>1(1)(d)(2)a</p> <p>1.</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p>	<p>JABEE</p> <p>7.</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p> <p>11.</p> <p>12</p>
---	---

--	--

--	--

	Web
--	-----

--	--

--	--

--	--

--	--

<p style="text-align: center;">B< >, JABEE(d) (2) a</p> <p>(1)</p> <p>(2)</p> <p>(1)</p> <p>(2)</p>	<p>(1)</p> <p>(2)</p> <p>(1)</p> <p>(1)</p> <p>(2)</p> <p style="text-align: right;">QR</p>
<p>100 80 79 65 64 60 59</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子機械工学論講	平成20年度	専攻科担当教員	専2	前期	学修単位2	必

[授業のねらい]

特別研究に関連した国内外の論文などを講読或いは輪読して基本的事項を理解し、最近の研究動向を知るとともに、その内容をまとめて紹介する能力を培う。さらに、質疑応答などにより内容を発展させ、特別研究を進める上での基礎を培う。

[授業の内容]

全ての内容は、学習・教育目標(B)＜専門＞＜展開＞、(C)＜英語＞＜発表＞[JABEE 基準 1(1)(d)(2)a),(f), (h)]に対応する。

特別研究を発展させる上で必要な基本的な文献、および最近の国内外の論文資料を講読或いは輪読し、研究動向を知るとともに、内容の解説、紹介および質疑応答を通して、技術者として不可欠な文献の理解力と発表能力を培う。また、最新の文献を入手するために必要な、データベース等を利用する文献検索の方法を修得する。

特別研究のテーマに関連したもので、以下の分野から選択する。

1. ＜機械工学＞ 機械力学、材料力学、計算力学、有限要素法、計算機援用工学、弾性学、熱力学、熱工学、流体工学、気液混相流、液体の微粒化、精密工学、機械工作法、精密加工、制御工学、応力ひずみ解析、真空工学
2. ＜電気・電子工学＞ 高電圧工学、送配電工学、電子工学、電子回路、電子物性、放電物理、固体電子工学、集積回路工学、情報科学、知能情報学、ニューラルネットワーク、パターン認識、画像処理工学、制御工学、電子線機器学
3. ＜電子情報工学＞ 電子工学、半導体デバイス、情報電子回路、電子計測、環境電磁工学、放電応用、超真空工学、電磁エネルギー工学、情報制御システム、バイオロボティクス、情報工学、通信伝送工学、自然言語処理、バーチャルリアリティ

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 特別研究に関する国内外(海外のものについては特に英文論文)の論文の講読或いは輪読ができる。
2. 論文の検索方法が修得でき、関連する先行研究について論文の調査ができる。

3. 講読或いは輪読した論文について、内容をまとめることができ、指導教員に内容を明確に説明することができる。

[この授業の達成目標]

論文の検索方法を修得して、特別研究に関する国内外(海外のものについては特に英文論文)の論文の講読或いは輪読し、関連する先行研究について論文の調査を行って、その内容を指導教員に報告できる

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1～3の習得度を輪読およびそれらに関するレポートの内容により評価する。1～3に関する重みは同じである。輪読とレポートのレベルは、合計点の60%の点数を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項]

論文の選定には特別研究の指導教員と十分に相談すること。また、周辺分野の基本的な事項にも十分な関心を払うこと。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]

それぞれの特別研究に関連する基礎知識および英語の能力

[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習及びレポートを記述するのに必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。

教科書：指導教員がそれぞれ指示した論文、テキストなど

参考書：

[学業成績の評価方法および評価基準]

各自に課せられた輪読およびそれらに関するレポートの結果により学業成績を評価する。

[単位修得要件]

評価結果が60点以上であること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子機械工学実験	平成20年度	専攻科担当教員	専2	前期	学修単位2	必

[授業のねらい]

専攻科特別研究と、また、学位授与申請のための学修成果レポート作成の準備として、配属された機械、電気、電子情報工学分野の研究室において、これまでの研究をさらに進展させるとともに、成果をまとめるための技術と知識を養う。

[授業の内容]

全ての週の内容は、学習・教育目標(A)＜意欲＞(B)＜基礎＞＜専門＞＜展開＞[JABEE 基準 1(1)(d)(2)b)c)d),(e),(g),(h)] に対応する。

機械、電気、電子情報工学分野の配属された研究室において、指導教員の下で、特別研究テーマに関係した実験、プログラミング、シミュレーション、測定などをさらに進展させ、技術者としての研究開発能力を培う。また、共同作業により、コミュニケーション能力を身につけるとともに、データの整理、報告書作成、プレゼンテーションなどを通して、技術者として自主的に仕事を進めるために必要な能力を養う。

実験は特別研究のテーマに関連したもので、以下の分野から選択する。

1. <機械工学> 機械力学, 材料力学, 計算力学, 有限要素法, 計算機援用工学, 弾性学, 熱力学, 熱工学, 流体工学, 気液混相流, 液体の微粒化, 精密工学, 機械工作法, 精密加工, 制御工学, 応力ひずみ解析, 真空工学

2. <電気工学> 高電圧工学, 送配電工学, 電子工学, 電子回路, 電子物性, 放電物理, 固体電子工学, 集積回路工学, 情報科学, 知能情報学, ニューラルネットワーク, パターン認識, 画像処理工学

3. <電子情報工学> 電子工学, 半導体デバイス, 情報電子回路, 電子計測, 環境電磁工学, 放電応用, 超真空工学, 電磁エネルギー工学, 情報制御システム, バイオロボティクス, 情報工学, 通信伝送工学, 自然言語処理, パーチャルリアリティ

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 先行研究について継続的学修を進めることができる。
2. 実験装置の設計, 測定器具の自作, 組み立て, プログラミング, シミュレーション, 測定準備の具体的作業を進めることができる。

3. 行った基本的な実験等について, 目的, 結果, 考察をまとめてレポートにすることができる。
4. 上記報告書に基づいて, 指導教員に成果の内容を明確に説明することができる。
5. 今後の研究方針について展望を述べるることができる。

[この授業の達成目標]

専門分野の実験技術の体験を通して専門的な実験技術を修得し, 先行研究について調査・学修を踏まえて, 実施した実験等について, 目的・結果・考察をまとめてレポートにすることができる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1～5の習得の度合をレポートと実験操作・作業により評価する。レポート等に求めるレベルは, 百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 実験の計画, 実施に当たっては, 必ず指導教員に報告し, その指導に従うこと。器具, 装置の使用に当たっては, 指導教員から指示された注意事項を守ること。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]

実験テーマに関する基礎的事項についての知見, あるいはレポート等による報告書作成に関する基礎的知識。

教科書:

参考書:

[学業成績の評価方法および評価基準]

各自に課せられた実験操作・作業およびレポートにより学業成績を評価する。

[単位修得要件]

評価結果が60点以上であること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
特別研究	平成20年度	電子機械工学専攻 特別研究指導教員	専1,2	通年	学修単位12	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>研究の遂行を通して、機械工学、電気電子工学や電子情報工学に関する高度な専門知識と実験技術を把握し、継続的・自主的に学習できる能力、あるいは修得した知識をもとに創造性を発揮し、計画的に仕事ができる能力を持つ学生を育成する。また、論文作成や研究発表を通して、文章表現力、プレゼンテーション等のコミュニケーション能力を育成する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべての内容は、学習・教育目標(A) <意欲>、(B) <展開>、(C) <発表>、<英語>、JABEE 基準 1(1)(d)(2)b)c)d)、(e)、(f)、(g)、(h)に対応する。</p> <p>学生各自が研究テーマを持ち、各指導教員の指導の下に研究を行う。テーマの分野は次の通りである。</p> <p>1. <機械工学> 機械力学、材料力学、計算力学、有限要素法、計算機援用工学、弾性学、熱力学、熱工学、流体工学、気液混相流、液体の微粒化、精密工学、機械工作法、精密加工、制御工学、応力ひずみ解析、真空工学等</p>	<p>2. <電気電子工学> 高電圧工学、送配電工学、電子工学、電子回路、電子物性、放電物理、固体電子工学、集積回路工学、情報科学、知能情報学、ニューラルネットワーク、パターン認識、画像処理工学、制御工学、電子線機器学等</p> <p>3. <電子情報工学> 電子工学、半導体デバイス、情報電子回路、電子計測、プラズマ理工学、放電応用、超真空工学、電磁エネルギー工学、情報制御システム、バイオロボティクス、情報工学、通信伝送工学、通信符号理論、自然言語処理、パーチャルリアリティ等</p> <p>・ 専攻科1年次の特別研究中間発表会で、それまで行ってきた特別研究の内容とそれ以降の研究計画を発表する。 専攻科2年次の学年末に、特別研究論文を提出する。また、専攻科2年次の学年末に、最終発表会で特別研究の発表を行う。</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 研究を進める上で準備すべき事柄を認識し、継続的に学習することができる。</p> <p>2. 研究上の問題点を把握し、その解決に向けて自律的に学習することができる。</p> <p>3. 研究のゴールを意識し、計画的に研究を進めることができる。</p>	<p>4. 研究の過程で自らの創意・工夫を発揮することができる。</p> <p>5. 中間発表と最終発表において、理解しやすく工夫した発表をすることができ、的確な討論をすることができる。</p> <p>6. 最終発表において、英語による概要説明ができる。</p> <p>7. 特別研究論文を論理的に記述することができる。</p> <p>8. 特別研究論文の英文要旨を適切に記述することができる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>特別研究にテーマに関する基本的事項を理解し、研究のプロセスを通して高度な専門知識と実験技術ならびに継続的・自主的に学習できる能力、創造性を発揮し計画的に仕事ができる能力、英語による基本的なコミュニケーション能力を身に付けている。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～8の習得の度合いを特別研究の中間発表、最終発表、特別研究論文の内容により評価する。1～8に関する重みは特別研究成績評価表に記載したとおりである。各発表と論文のレベルは、合計点の60%の点数を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。</p>
<p>[注意事項] 特別研究は学科で学んだ卒業研究に続いて行われるものであり、基本的には2年間或いは学科を含む3年間で1つのテーマに取り組むことになる。長期間に亘るのでしっかりと計画の下に自主的に研究を遂行する。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 研究テーマに関する周辺の基礎的事項についての知見、或いはレポート等による報告書作成に関する基礎的知識。</p>	
<p>教科書：各指導教員に委ねる。</p> <p>参考書：各指導教員に委ねる。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>特別研究成績評価表の配点にしたがって、特別研究論文(70%)、中間発表(14%)、最終発表(16%)で評価する。</p>	
<p>[単位修得要件]</p> <p>評価結果が60点以上であること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
生産設計工学	平成20年度	打田 元美	専2	後期	学修単位2	選

[授業のねらい]

近年の新素材の加工法とその部品に要求される精度は著しく向上している。本講義において先端技術の加工のメカニズムおよび加工システムを学ぶことにより、生産技術者あるいは設計技術者として必要な事項を習得する。

[授業の内容]

全ての週の内容は、学習・教育目標(B) < 専門 > および JABEE 基準 1(1)(d)(2)a)に対応する。

第1週 授業の概要

(加工技術) 難加工材料の加工

第2週 高精度加工技術

第3週 加工モデル解析

(加工の種類)

第4週 電氣的加工

第5週 電氣的加工の応用

第6週 化学的加工

第7週 化学的加工の応用

第8週 後期中間試験

第9週 高エネルギー・ビーム加工とその応用

第10週 射出成形法

第11週 三次元造形

第12週 超音波加工

第13週 研磨加工技術

(加工精度の評価と応用)

第14週 光応用計測

第15週 バイオメカニクスへの応用

第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認、授業のまとめ

[この授業で習得する「知識・能力」]

(加工技術)

1. 基礎的な加工方法について説明できる。
 2. セラミックスなどの難加工材の加工方法について説明できる。
 3. 切削理論を簡単に説明できる。
 4. 精密加工法を説明できる。
- (加工の種類)
1. 加工法をエネルギー・供給別に分類し、説明することができる。

2. 放電加工の原理と応用について説明できる。
 3. 金属の腐食を利用して加工する方法について説明できる。
 4. レーザ加工の原理と加工法について説明できる。
 5. レーザ加工の応用について説明できる。
 6. コンピュータ制御を利用した加工法を説明できる。
- (加工精度評価と応用)
1. 表面粗さ測定を接触法と非接触に分けて説明できる。
- 医療分野などにおいて応用できる範囲について説明できる

[この授業の達成目標]

生産設計工学に関する、基本事項を理解し、加工技術、種類および加工精度の評価についての専門知識を習得し、新しい生産設計分野である、光計測やバイオメカニクスへの応用ができる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」(加工技術)1~4, (加工の種類)1~6, (加工精度評価と応用)1の習得の度合いを中間試験、期末試験および加工に関する課題を出し、その内容により評価する。評価における「知識・能力」の重みはすべて同一とする。試験問題と課題のレベルは百点法により60点以上の得点を習得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 自己学習を前提とした規定の単位制に基づき授業を進め、課題提出を求めたりするので、日頃の勉強に力を入れること。対象が工学全分野にわたるため、積極的な取り組みを期待する。疑問が生じたら直ちに質問すること。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]

数学、物理は理解している必要がある。

[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習(中間試験、定期試験のための学習も含む)及び課題作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。

教科書: 「超精密加工学」 丸井悦男(コロナ社)

参考書: 授業時に参考プリント配布

[学業成績の評価方法および評価基準]

後期中間、後期末の2回の試験の成績(平均点)を80%, 課題の成績を20%, として評価する。再試験は行わない。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
ヒューマンインターフェース	平成20年度	箕浦 弘人	専2	前期	学修単位2	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>「ものの使いやすさ」を意識した人間と機器とのインターフェースの設計の指針を、身近なものや先端技術を例に挙げ学ぶ。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>全ての週の内容は、学習・教育目標(B) < 専門 > , JABEE 基準 1(1)(d)(2)a)に対応する。</p> <p>第1週 人間の感覚と知覚</p> <p>第2週 人間の生理特性・認知と理解</p> <p>第3週 デザイン目標とユーザ特性</p> <p>第4週 対話型システムの設計</p> <p>第5週 インターフェースの評価</p> <p>第6週 人間と人間のインターフェース</p> <p>第7週 インターフェースの評価の実践(身の回りの物について使いやすさについて考察し,改善点について検討する。(受講者がプレゼンテーションし,互いに評価する)(学習・教育目標(C) < 発表 > , JABEE 基準 1(1)(f))</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>第9週 キーボード・マウスの種類と入力方法</p> <p>第10週 プリンタの種類と印刷方法</p> <p>第11週 ディスプレイの種類と表示方法</p> <p>第12週 ビジュアルインターフェース</p> <p>第13週 マルチユーザインターフェース</p> <p>第14週 先端技術とインターフェース</p> <p>第15週 インターフェース開発の今後</p> <p>第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認,授業のまとめ</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1.人間の知覚と感覚,生理特性,認知と理解について説明できる。</p> <p>2.デザインの目標とユーザ特性について説明できる。</p> <p>3.インターフェースの設計と評価について説明できる。</p> <p>4.人間と人間の意思疎通を良好に行う為に必要な点を理解している。</p>	<p>5.コンピュータの入出力機器(キーボード・マウス・プリンタ・ディスプレイ)の原理が説明できる</p> <p>6.先端技術を用いたインターフェースの概要を理解し,その問題点を検討することができる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>人間の身体的・生理的・心理的特性を基礎として,種々のヒューマンインターフェースを評価することができ,現在用いられている機器の基本原則を説明でき,関連する先端技術について理解している。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～6の習得の度合を中間試験,期末試験,レポートにより評価する。評価における「知識・能力」の重みの概ね均等である。試験問題とレポート課題のレベルは,100点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。</p>
<p>[注意事項] 高機能な機器を開発する上で,いかに利用し易くそれを作るかということは非常に重要な問題となる。この講義でそのような問題の解決のためのいくつかの手法を学んでほしい。具体的な例を多く挙げて説明するので,興味を持って聞いてほしい。なお,単位制を前提としてレポート提出を課す授業進行を行うので,日頃の勉強に力を注ぐこと。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 情報基礎,電気電子回路の基礎があれば十分である。新しい教科であり,特に要求される基礎知識なしに受講できる。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と,予習・復習(中間試験,定期試験のための学習も含む)及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が,90時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書:「ヒューマンコンピュータインタラクション」 岡田謙一 他 (オーム社)</p> <p>参考書:「認知インターフェース」 加藤隆 (オーム社)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 定期試験,中間試験の2回の試験の平均点を70%,課題(プレゼンテーション・レポート)の平均点を30%で評価する。再試験は実施しない。</p> <p>[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
メカトロニクス工学特論	平成20年度	斉藤 正美	専2	後期	学修単位2	選

[授業のねらい] 機械, 電気, 電子情報工学の融合であるメカトロニクス工学の基本をなす制御理論と技術のより深い理解と修得を目的として, レーダアンテナ系や倒立振り制御系を対象として実践的な制御系設計手法を習得する。

[授業の内容] 第1週～16週までの内容はすべて, 学習・教育目標 B <専門> と JABEE 認定基準 1(1)の(d)(2)a)に相当する項目である。

- 第1週 制御系におけるモデリングと伝達関数
- 第2週 制御システムの等価性、特性方程式と特性根
- 第3週 根軌跡法による安定判別
- 第4週 レーダアンテナ系の伝達関数とブロック線図
- 第5週 レーダアンテナの速度制御と根軌跡
- 第6週 レーダアンテナの位置制御と根軌跡
- 第7週 P I D制御による系の補償
- 第8週 中間試験

- 第9週 現代制御理論 - 状態方程式と可制御・可観測
- 第10週 倒立振り・台車系の制御における 数学モデルの作成, 状態方程式と出力方程式の導出, 可制御・可観測の判定
- 第11週 倒立振り・台車系の制御 - 状態フィードバック法と極配置法によるフィードバック係数の決定
- 第12週 倒立振り制御系の設計 - 極配置法, 最適制御法
- 第13週 MATLABによる制御系の設計1 - Control System Toolbox とその機能
- 第14週 MATLABによる制御系の設計2 - Simulink とその機能
- 第15週 倒立振子の制御の実際(コンピュータ制御システム)
- 第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認, 授業のまとめ

[この授業で習得する[知識・能力]]

- 1. 系の伝達関数、根軌跡法による安定判別等が理解できる。
- 2. 古典制御理論によるレーダアンテナ系の速度・位置制御法が理解できる。
- 3. PD制御、PID制御等が理解できる。
- 4. 状態方程式、出力方程式の概念が理解でき、与えられたシステムのモデル化ができる。

- 5. 可制御・可観測性の判別法が理解できる。
- 6. 倒立振り制御系の状態フィードバック制御法が理解できる。
- 7. 極配置法, 最適制御による倒立振り制御系の設計ができる。
- 8. 倒立振子のコンピュータ制御システムが理解できる
- 9. MATLAB - Control System Toolbox の機能を理解し, それを用いて基本的な制御系設計ができる。
- 10. MATLAB - Simulink の機能を理解し, それを用いて基本的な制御系設計ができる。

[この授業の達成目標]

レーダアンテナや倒立振子をモデルとして, PID制御などの古典制御理論の基本, 及び現代制御理論の柱である状態フィードバック法, 可制御性・可観測性理論等が理解でき, また MATLAB を用いた実践的な制御系設計を行うことができる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1～8の習得の割合を中間試験と期末試験により評価する。また、「知識・能力」9, 10については MATLAB による制御系設計に関する課題を出し, そのレポートの内容により評価する。それぞれの「知識・能力」の重みの目安は, 1～8で合計70%, 9～10で30%とする。試験問題とレポート課題のレベルは, 百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 自己学習を前提とした規定の単位制に基づいて授業を進め, また本工学分野における問題解決能力を養うために課題提出を求めるので, 授業外における勉強にも力を入れること。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 力学, 基礎制御理論, 電気電子回路の基礎知識が必要である。

[自己学習] 授業で保証する学習時間と, 予習・復習(中間試験, 定期試験のための学習も含む)及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が, 90時間に相当する学習内容である。

教科書: 「機械制御入門」雨宮好文編, 末松良一著(オーム社)。なお, 制御系設計課題の自己学習のための自作テキストを用意する。
参考書: 「MATLABによる制御設計」野波健蔵編(東京電機大学出版局)

[学業成績の評価方法および評価基準] 後期中間, 学年末の2回の試験の成績(平均点)を70%, 課題の成績を30%として評価する。再試験は行わない。

[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
新素材工学	平成20年度	伊藤 明・西村 一寛	専2	前期	学修単位2	選

[授業のねらい] 材料技術の進歩には目を見張るものがあり、「材料を制するものは産業を制する」といわれるほどに、材料の重要性が認知されるようになった。科学技術のあらゆる分野での基盤をなすものとしての材料を新しい観点で見直し、材料および素材への技術者としての認識を深めることを目的とする。授業では主としてセンサ用材料を取り上げ、その特性を中心として学習する。

<p>[授業の内容] すべての内容は、学習・教育目標(B)〈専門〉および JABEE 基準 1(1)(d)(1)に対応する。</p> <p>第1週 シリコンの結晶成長，化合物半導体</p> <p>第2週 光ファイバー，石英ガラスファイバーの製造</p> <p>第3週 半導体発光素子</p> <p>第4週 半導体発光素子</p> <p>第5週 受光素子</p> <p>第6週 太陽電池</p> <p>第7週 液晶</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>第9週 磁性体の種類，磁気モーメントと磁化曲線</p> <p>第10週 磁化過程，磁気モーメントの合成と反磁界，磁気異方性</p> <p>第11週 磁化の温度変化，硬質磁性材料</p> <p>第12週 軟質磁性材料，半硬質磁性材料</p> <p>第13週 その他の磁性材料，誘電体，圧電体</p> <p>第14週 P-E 曲線，焦電体，誘電現象</p> <p>第15週 分極の種類，圧電体・焦電体の応用例，磁性材料，誘電材料の新しい応用展開</p> <p>第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認，授業のまとめ</p>
--	---

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. シリコン，化合物半導体の基礎的事項を理解している。</p> <p>2. 光ファイバーに関する基礎的事項を理解している。</p> <p>3. 発光・受光素子の原理に関する基礎的事項を理解している。</p> <p>4. 太陽電池の原理に関する基礎的事項を理解している。</p> <p>5. 液晶に関する基礎的事項を理解している。</p>	<p>6. 磁気材料に関する基礎的事項を理解している。</p> <p>7. 各種磁性材料の特徴などについて理解している。</p> <p>8. 誘電材料に関する基礎的事項を理解している。</p> <p>9. 各種誘電材料の特徴などについて理解している。</p>
--	---

<p>[この授業の達成目標]</p> <p>半導体，光・電子材料，磁性材料，誘電体材料の基礎知識を理解し，新素材として，それらのセンサ用材料としての特性を理解している。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～9の習得の割合を中間試験，期末試験，レポートにより評価する。評価における「知識・能力」の重みは1～5を各10%，6～9を12.5%とする。試験問題，小テストとレポート課題のレベルは，百点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。</p>
--	---

[注意事項] 規定の単位制に基づき，自己学習を前提として授業を進め，自己学習の成果を評価するためにレポート提出を求めるので，日頃から自己学習に励むこと。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 物理および化学の一般的な基礎知識。

[自己学習] 授業では取り上げることができない分野での素材等については各自参考文献などにより学習してもらいたい。また，課題提出を求めたり小テストを行うなどして自己学習の成果に対する評価を実施することもある。授業で保証する学習時間と，予習・復習（中間試験，定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が，90時間に相当する学習内容である。

教科書：澤岡昭著，「電子材料」，森北出版
 参考書：非常に範囲が広く，各工学分野における材料を対象として参考書が数多く出版されている。

[学業成績の評価方法および評価基準]

中間試験，定期試験の2回の試験の平均点で評価する。再試験を実施した場合には，60点を上限として評価する。小テストやレポートを実施した場合には，試験の結果を70%，小テストの結果を10%，課題(レポート)を20%で評価する。

[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子線機器工学	平成20年度	花井 孝明	専2	前期	学修単位2	選

[授業のねらい]

真空中を一定の速度で運動する多数の電子を電子線または電子ビームと呼ぶ。電子線を利用する機器は、クライストロン、進行波管などの高周波通信機器、陰極線管（CRT）、撮像管などの画像機器、電子顕微鏡などの計測機器と幅広い。この授業では、電子線機器を知るための基礎となる電磁界中での電子の運動方程式を学び、種々の条件の下で電子の運動を定量的に論ずる手法を学ぶ。さらに、各種電子線機器に用いられる電子レンズの作用についてその概略を学ぶ。

[授業の内容]

すべての内容は学習・教育目標(B)〈専門〉とJABEE基準1(1)(d)(2)a)に対応する。

- 第1週 電子の粒子性と波動性
- 第2週 電子線機器の種類と用途、電子線機器の構成要素
- 第3週 一様電界中での電子の運動とその応用
- 第4週 一様磁界中での電子の運動とその応用
- 第5週 一般電磁界と直交電磁界における運動方程式
- 第6週 直交電磁界中での電子の運動
- 第7週 直交電磁界を用いた電子エネルギー分析

- 第8週 中間試験
- 第9週 円筒座標系における運動方程式の導出
- 第10週 運動方程式と軌道方程式、Bushの定理
- 第11週 軸対称な電磁界中での電子の運動、電子レンズ
- 第12週 近軸軌道方程式の導出
- 第13週 近軸電子線と電磁界のレンズ作用
- 第14週 電子レンズを用いた回折パターンを観察
- 第15週 レンズ公式と近軸不変量
- 第16週 定期試験の答案返却と達成度の確認、授業のまとめ

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 一様電界中の電子の運動を定量的に論ずることができる。
2. 一様磁界中の電子の運動を定量的に論ずることができる。
3. 直交電磁界中の電子の運動方程式を理解し、運動方程式を解いて電子軌道を求めることができる。

4. Bushの定理を理解し、電子の角速度を求めることができる。
5. 近軸軌道方程式の導出過程を理解し、近軸軌道の性質を説明することができる。
6. 電子レンズの作用を理解し、基本的なレンズ公式を導くことができる。

[この授業の達成目標]

電磁界中での電子の運動方程式を基礎として、種々の条件の下で電子の運動を定量的に論ずることができ、電子線機器への応用として電子レンズの作用を求めることができる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1～6の習得の割合を中間試験、期末試験、レポートにより評価する。評価における「知識・能力」の重みの目安は1, 2, 4, 6を各15%程度、3, 5を各20%程度とする。試験問題とレポート課題のレベルは、100点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。

[注意事項] 規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進め、自己学習の成果を評価するためにレポート提出を求めるので、日頃から自己学習に励むこと。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 質点の力学、電気磁気学の基礎知識

[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、90時間に相当する学習内容である。

教科書：なし、ノート講義

参考書：「電子・イオンビーム光学」 裏克己（共立出版）、「電子管工学」 桜庭一郎（森北出版）

[学業成績の評価方法および評価基準]

中間、期末の2回の試験の平均点を80%、レポートの評価を20%として評価する。ただし、中間試験で60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として中間試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。